

2020 年度 チャイルドライン OSAKA 年次報告書



I	チャイルドライン OSAKA 概要	1 ページ
II	電話のデータ	2 ページ
III	2020 年度をふりかえって	
	データから見える子どもの姿	5 ページ
	コロナ禍で聞いた子どもの声	7 ページ
	コロナ禍が子どもたちにもたらしたものは？	7 ページ
	子どもの権利が大切にされる社会へ	8 ページ

I チャイルドライン OSAKA 概要

1. 事業の開始 2001年1月より常設
2. 事業目的 子どもたちが気持ちを聴いてくれる人に出会い、安心して話せる電話としてチャイルドラインを開設し「子どもの意見表明」(注※1)の場を確保します。
カード・ポスター・インターネットなどを通じ、チャイルドラインの広報をすることで、子ども・子どもにかかわるおとな・社会へ、子どもが意見表明することの大切さを伝えます。
3. 実施内容 18歳までの子どもの専用電話「チャイルドライン」の開設
全国統一フリーダイヤル(0120-99-7777)で子どもたちの声を聴く
毎週金曜日 16時～21時チャイルドライン開設

第1回緊急事態宣言発令中(2020年4/7～5/25)は活動休止(但し、全国組織のため全体としては休止せず子どもの声を受けとめた)
日曜スポットチャイルドライン開設 2/28, 3/28の2回
9月～11月 Zoomで養成講座、対面で実践講座を実施し 1名が新スタッフとして活動開始
大阪市ボランティア活動振興基金より助成金交付
厚労省新型コロナウイルス対策費用の補助金受給
「イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン」に参加
定例会 8回
エリア研修(3/14)講師 明橋大二氏
「ウイズ・コロナ時代のメンタルヘルス」
チャイルドライン支援センター総会・臨時総会、書面議決で参加
大阪連絡会、近畿北陸エリア会議、参加
2019年度年次報告書作成
4. 広報活動 動画メッセージ ～たいせつなあなたへ～
第1回緊急事態宣言発令中に作成し、子ども情報研究センターホームページに掲載
＜カード配布＞ 大阪市立中学1年生へカード配布(約20000枚)
港区の大阪市立中学2年・3年生へカード配布(約1100枚)
港区の大阪市立小学校全学年へカード配布(約3900枚)

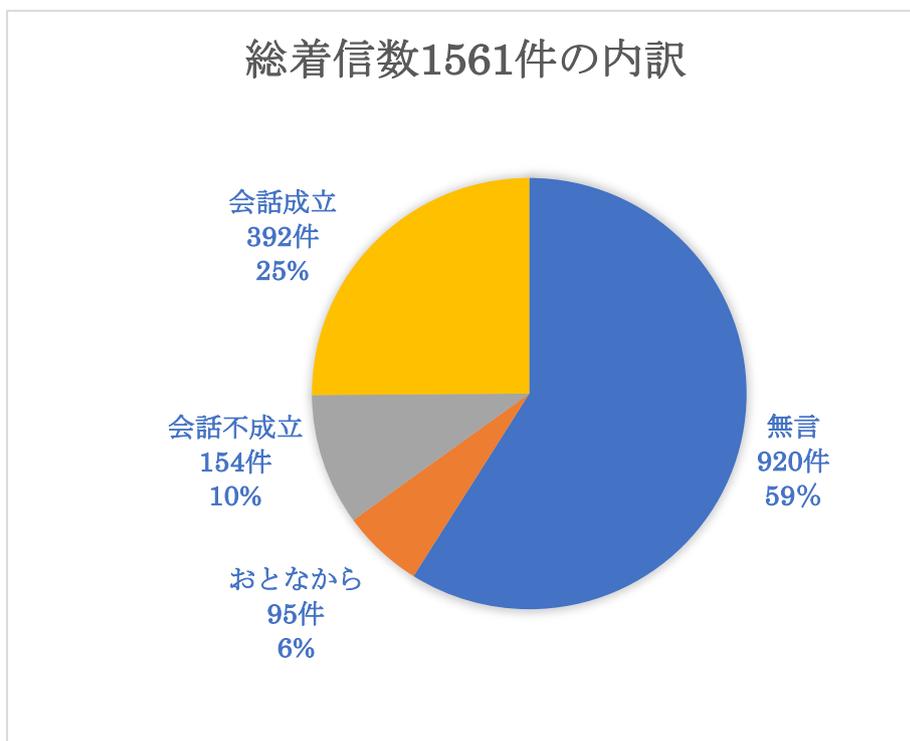
〈ポスター配布〉 大阪市立中学校へ配布（132 枚）
港区の大阪市立小学校へ配布（11 枚）
大阪府下の府立高校、私立小・中・高校へポスター配布（大阪連絡会としての取り組み）

2020 年度に配布したチャイルドラインカード

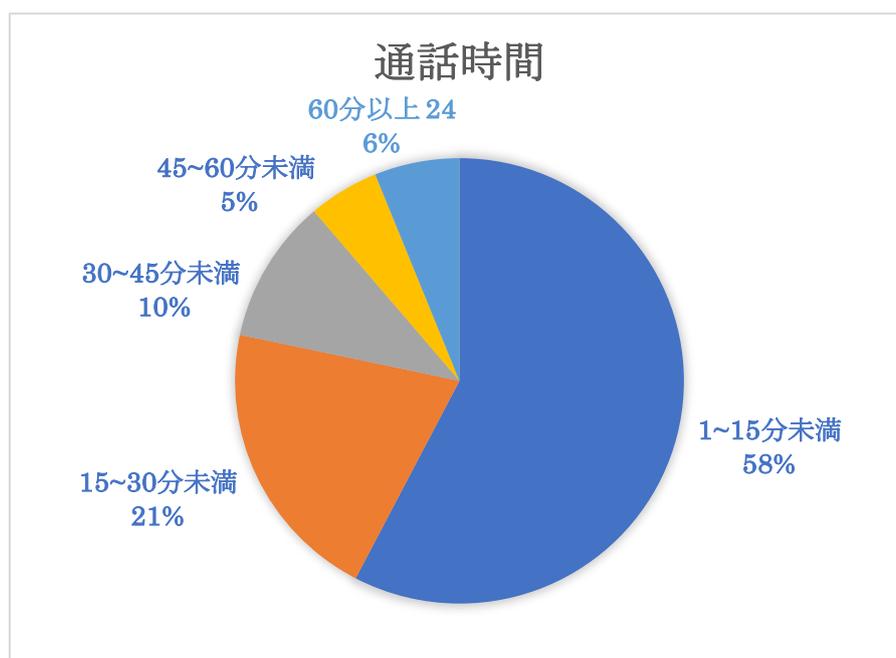
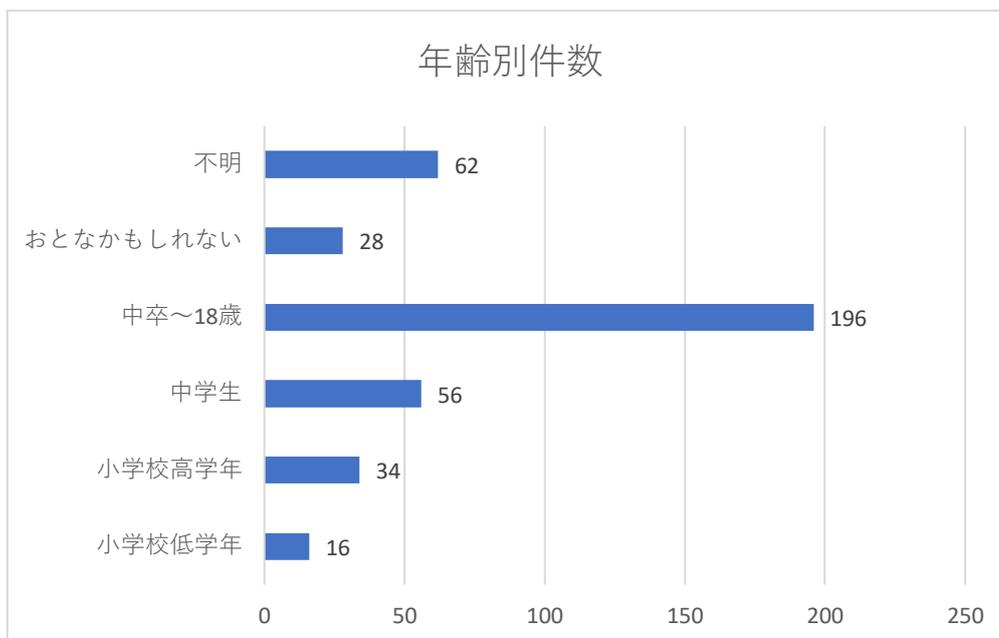


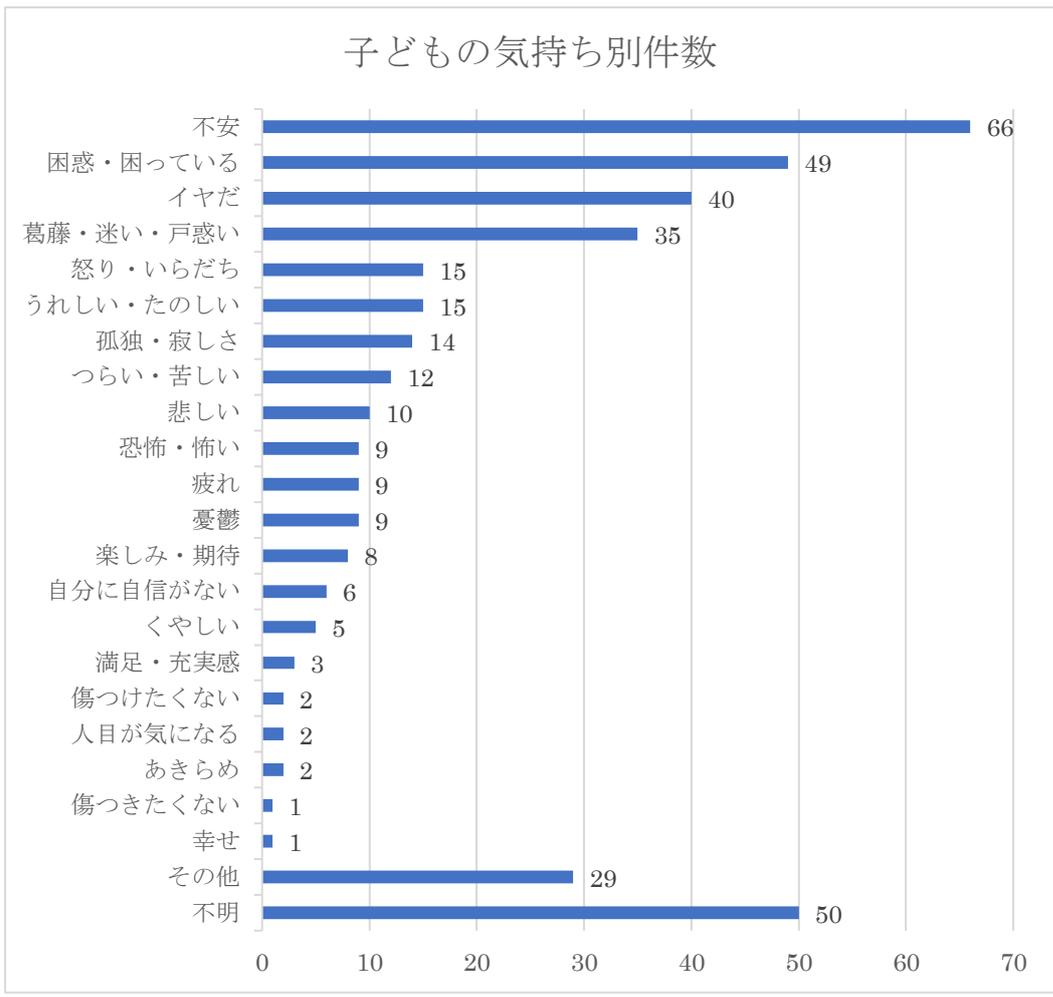
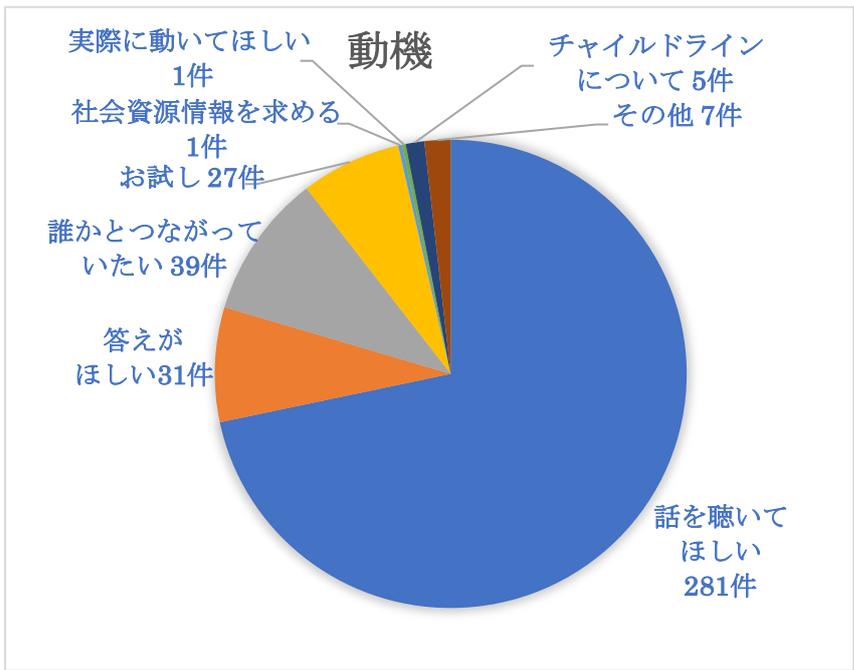
Ⅱ 電話のデータ

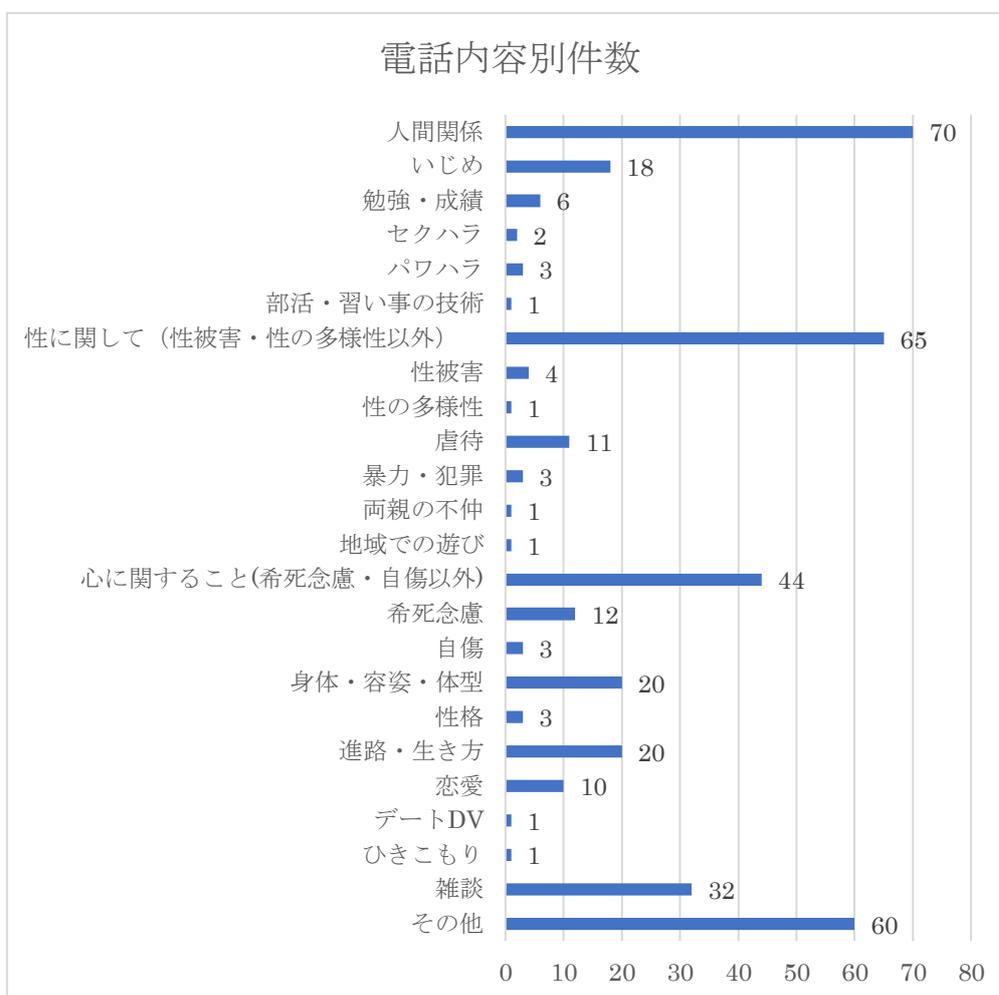
2020 年度は 45 日チャイルドラインを開設し、1561 件の電話を受けました。



会話成立した 392 件の内訳







Ⅲ 2020年度をふりかえって

データから見える子どもの姿

コロナ禍においても変わりなく子どもから電話がかかっていました。件数が昨年度より減少したのは、緊急事態宣言下に開設できなかった日があったからです。（チャイルドラインは全国に実施団体があり、チャイルドライン全体としては休止を免れ、変わらず子どもの声を聴くことができました）

子どもたちの電話からは丁寧な説明もなしにいろいろなことが決定されたこと、制限された生活であったこと、家族の経済状況が悪化し、少なからず影響を受けたこと、ステイホームでの家族関係に変化があったことなど様々な混乱が続いていることがうかがえました。その中で、新しい生活様式（マスク・手指消毒など）に順応しようと頑張る子ども、おとなの対応や社会への不信を語る子ども、どちらにも出会いました。どの立場であっても、おとなの言動を静かに見つめ、自分事として今を必死に生きようとしている子どもたちの力強さを感じました。

また、データには現れませんが電話をかける環境にない子どもが、「ステイホーム」という合い言葉で家庭内に閉じ込められ実態が見えにくくなり、どこにも SOS が出せず社会から切り離されたことが課題としてみえてきました。

コロナ禍において子どもの毎日はどう変わったのでしょうか？データで集約された子どもの気持ちに注目してみると、マイナス感情（つらい・困っている）などに関しては、意外にもコロナ以前の割合と大きく変わりませんでした。おとなでも色々と不安が多かった時期、子どもたちが不安を抱えていないわけではないのになぜなのでしょう？もしかしたら、不安な気持ちやマイナスの感情を言っても仕方がないとあきらめているのかもしれませんが。それとも、おとな社会もいろいろ不安そうだから、言いたいこともぶつけられないと考えていたのかもしれませんが。

一方、プラス感情（うれしい・たのしい）などを話す電話の割合は少し減っています。もしかしたら世の中全体が大変な状況の中、自分だけ楽しんでいいのかと言う同調圧力が働いたのかもしれませんが。しかし、子どもたちが無邪気に日常のことを話せない雰囲気になっているのだとしたらとても心配です。以前はよく話してくれていた長期休みに「祖父母の家に行った」とか、「友達と遊びに行った」なども言いにくい雰囲気があるのかもしれませんが。『遊ぶ権利』（注※2）は大切な子どもの権利です。この1年、心も体も開放しエネルギーを発散する時間があまりとれてなかったのではないかと気がかかります。

また、データ項目にない「その他」の電話の割合が増えていることも今年度も特徴です。具体的な内容はかけませんが、コロナに関する話題の中で「心配している」「退屈している」「甘えたい」などの気持ちを話してくれる電話もありました。

内容の項目でも「雑談」や「自分のこと」を話したい、聴いてほしい電話が増えました。これは全国のデータでも顕著でした。学校生活の中でも感染予防のため「密を避ける」「黙食」など、様々な取り組みがありました。子どもたちが圧倒的な会話不足に陥っている様子がうかがえました。他方、休校やステイホームの影響で自分のことをじっくりと考える時間が増えたのではないかととらえられます。

電話をかけた動機でも「答えがほしい」が減り、「誰かとつながりたい」が増えています。つながりや承認欲求だけだと、SNS などネット上でも埋めることができるかもしれませんが、だれかの声を聴きたいときやだれかの気配を感じたくてチャイルドラインを利用しているのだとしたら、その役割は果たせたのかもしれませんが。

…本当に身近な人には話せない、身近なところでは固定されたイメージから抜け出せない。一生懸命話しても結局わかってもらえない、受け止めてもらえないとわかるのが怖い。普段と違う自分を見せられない…。子どもの生きている世界の狭さを推し量ると、顔の見えないチャイルドラインだからこそ、話せることがあるのかもしれませんが。

コロナ禍で聞いた子どもの声

2020年度は新型コロナウイルスの影響で今までにない生活を強いられました。4月には緊急事態宣言が全国に拡大され、休校のまま新学期をむかえました。その後、学校は再開しましたが、子どもたちの生活も大きく変わりました。

下記に2020年度中にチャイルドライン OSAKA に寄せられた「子どもの声」の中からコロナという言葉がでてきたものをまとめています。(個人が特定されないようプライバシーに配慮して編集しています)

「イベントが中止になった。不要不急ってなに？」

「こんなに春休みが長いのは初めて。家の中で兄弟の距離感が近すぎてしんどい。学校が始まってうれしい。」

「受験の時コロナで、先のことあんまり考えなかった。6月から学校が始まるけど、不安。」

「分散登校でまわりは知らない子ばかり、友だちできるかなあ。」

「コロナのせいでお母さんの仕事がなくなった。」

「電車でマスクなしで大声でしゃべっているおとながいる。自分は不安だから、予防しているのに。」

「コロナのことがあって、そのまま学校に行けずやめてしまった。」

「コロナが怖いから、また休校にしてほしい。」

「コロナを理由に友だちに会うのを断った。後悔している。」

「看護師のお母さんが忙しくて甘えられない。」

「外に出るの怖いから、通院していた病院に行けなくなってしまった。」

「いろいろ悩んでいるが、コロナで不安な気持ちが強まった。」

「コロナにかかったかも。怖い。」

「入院中の母に会えない。がまんしている。」

「go to トラベルに行った人が多いから増えたんじゃないですか？」

コロナ禍が子どもたちにもたらしたものは？

子どもたちの気持ちの変化はあったのか？

子どもたちが気持ちを話すには聴く側の余裕・余白が必要です。コロナ禍ではおとなの余裕のなさが子どもの気持ちに蓋をさせていたり、気持ちより事実が優先されていたりしたように思います。

子どもたちがチャイルドラインで話してくれる内容は大きく変わっていませんが、リアルな生活の中でも同じように自分のいろいろな気持ちを話しているのかはわかりません。友だちや先生とも、互いにマスクで覆われた姿での毎日です。新しい友だちができたけどマ

スク姿しか知らない、と言う子どももいました。「先生が怒っているのかそうじゃないのかわからない」「友だちの顔が見えなくてさみしい」と話す小学生からの電話もありました。

もしかしたら電話の方が距離を感じる事がなく、以前のように話せているのかもしれませんが。

子ども時代の大切さは保障されていたか？

どの年齢の子どもにとっても1年1年は二度と戻らない大切な時間です。おとなは子どもたちの大切な1年をコロナ禍においても保障できたでしょうか？不便を強いられ、諦めさせられた子どもたちの代弁を誰がしたのでしょうか？密を避けるための分散登校などは本当に子どもの立場にたった対策だったのでしょうか？

学校で過ごす時間は学習保障だけではない、対人関係を学び、いろいろなことにチャレンジしたり失敗したりする大切な時間です。子どもの毎日は「不要不急」に当てはまりません。むしろ不要不急こそ大切にされる時期とは言えないでしょうか。

子どもたちも、おとな社会の不安定さを目の当たりにし、価値観の揺れ動きを感じた1年でした。今まであたりまえとっていた行事が次々となくなりました。…努力や頑張りだけでなんともならないことがある、自分ひとりでどうしようもないことがある…知らず知らずにそんなメッセージを伝えてはいなかったかと、今一度振り返る必要があるように思います。

また、コロナ禍では様々な情報が流れました。感染予防対策や人との距離の取り方など大切な情報もあったと思いますが、本来なら個々で違っていていいところまでも統一した手段があるように聞こえました。おとなでも自分を見失いそうになる大きな価値観のうねりの中で、一人ひとりの気持ちや多様性を尊重されることや認めてもらうことが難しいと肌で感じたのではないかと懸念しています。

子どもの権利が大切にされる社会へ

チャイルドラインは子どもの声を受けとめる活動です。受け止めた声は小さな声として聴くだけでなく、社会を構成する一員からの発信として大切に扱っていきたいと思っています。チャイルドラインという匿名性の電話の中で話せたことを、子どもと直接関係性があるおとなとも話せたり、受けとめられたり、ともにかかわりを持ち、少しずつ変わっていきながら、主体性や実感のある日々を過ごせたら…。きっと『今』を生きている意味も見いだせるのではないのでしょうか。

その第一歩として、チャイルドラインは子どもの声を聴いた責任として、しっかりと社会に発信していきたいと思います。

また、先が見えにくい中だからこそ、子どもの声を社会に届け、子どもとともにこれからの社会を創っていけないだろうか？とも考えます。今、コロナ禍においてどの世代も初めての経験を同時に体験しています。それぞれの立場の声を集めて、次の世代へつなげていくこ

とはできないでしょうか？子どもたちが届けてくれた声を入りに、子ども参加の機会を増やしていけないでしょうか。

今後も子どもの声を聴く場を開き、子どもの権利が大切にされる社会の実現のため、子どもとおとなをつなぐ役割を担っていきたいと願っています

(注※1) 子どもの権利条約第12条 意見表明権

1. 締約国は、自己の見解をまとめる力のある子どもに対して、その子どもに影響を与えるすべての事柄について自由に自己の見解を表明する権利を保障する。その際、子どもの見解が、その年齢および成熟に従い、正当に重視される。
2. この目的のため、子どもは、とくに、国内法の手続規則と一致する方法で、自己に影響を与えるいかなる司法的および行政的手続においても、直接にまたは代理人もしくは適当な団体を通じて聴聞される機会を与えられる。

(注※2) 子どもの権利条約第31条 (休息・余暇、遊び、文化的・芸術的生活への参加)

1. 締約国は、子どもが、休息しかつ余暇をもつ権利、その年齢にふさわしい遊びおよびレクリエーション的活動を行う権利、ならびに文化的・生活および芸術に自由に参加する権利を認める。
2. 締約国は、子どもが文化的および芸術的生活に十分に参加する権利を尊重しかつ促進し、ならびに、文化的、芸術的、レクリエーション的および余暇的活動のための適当かつ平等な機会の提供を奨励する。

2020年度 チャイルドライン OSAKA 年次報告書



編集発行 公益社団法人 子ども情報研究センター

〒 552-0001

大阪市港区波除 4-1-37 HRCビル5階

TEL 06-4708-7087 FAX 06-4394-8501

HP <http://www.kojoken.jp/>